

参議院常任委員会調査室・特別調査室

論題	視点「日本の宝、和牛」
著者 / 所属	笹口 裕二 / 農林水産委員会調査室
雑誌名 / ISSN	立法と調査 / 0915-1338
編集・発行	参議院事務局企画調整室
通号	451号
刊行日	2022-11-1
頁	2
URL	https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rip_pou_chousa/backnumber/20221101.html

※ 本文中の意見にわたる部分は、執筆者個人の見解です。

※ 本稿を転載する場合には、事前に参議院事務局企画調整室までご連絡ください (TEL 03-3581-3111 (内線 75013) / 03-5521-7686 (直通))。

日本の宝、和牛

農林水産委員会 専門員

ささぐち ゆうじ
笹口 裕二

先月10月に12回目の全国和牛能力共進会が鹿児島県で開催された。5年に一度開催され、「和牛の五輪」と呼ばれる和牛の品質を競う品評会である。和牛新時代をテーマに41道府県の和牛が競い、「種牛の部」で鹿児島県が、「肉牛の部」で宮崎県が名誉賞を獲得した。

和牛には、黒毛和種、褐毛和種、日本短角種、無角和種の4種があるが、9割が黒毛和種で、共進会出品のほとんどを占める。その黒毛和種は、全国の繁殖雌牛の99.9%が昭和初期の「田尻号」という一頭の但馬牛の血統とも言われる。努力と手間を惜しまない改良と生産によってつくられた我が国農業の強みを象徴する品目といえよう。岸田総理は、授賞祝辞で「和牛は日本の宝」と挨拶した。サシと呼ばれる脂肪交雑を重視して改良が行われ、今では出荷される和牛の半数近くを最高格付けのA5が占める。そのため、今回の共進会では、見た目だけでなく、肉の味を左右する脂肪の質を競う部門が新設されている。

政府は、我が国の食品市場は今後縮小するとして、農産物の輸出促進に取り組んでいるが、中でも、牛肉は輸出目標金額が最大でエース的な存在である。その輸出先の第1位は、令和3年時点で、実はカンボジアとなっている。日本からの輸入を規制している中国への経由地になっていると推測されており、日本からの直接輸出を可能とするための協議が現在継続中である。第2位は米国である。米国輸出の低関税枠が令和4年は既に満杯となり、輸出の抑制要因となっている。輸出拡大に向けてこれらの課題の克服が求められる。

和牛は我が国のブランドであり、その遺伝資源と合わせ大切な知的財産であるが、世界ではオーストラリア産などの「Wagyu」が流通し、米国では繁殖雌牛が2,000万円超で取引される事例もあるという。令和2年に和牛遺伝資源二法が成立し遺伝資源管理が厳格化されており、和牛に関する知的財産の適切な管理と活用が求められる。

直近では、コロナ禍での需要変動、飼料価格高騰やそれを受けた子牛価格低迷等が牛肉生産の課題となっているが、中長期的には環境負荷の低減が重要な課題である。牛肉は、牛の反芻によってメタンガスが生じるなど、生産による環境負荷が高いとされている。また、糞尿による窒素排出が環境負荷となっているとして、EUではその規制が進められている。オランダでは規制強化に反発した畜産農家がトラクターデモまで実施するに至った。

我が国では、農林水産業は自然と親和性があり、環境負荷が低いイメージであるが、製造業、運輸業等と同じく、これからは、資源循環を推進し、SDGs達成に貢献していくことが求められる。農林水産省は、令和3年5月にみどりの食料システム戦略を取りまとめており、欧米とは異なるアジアモンスーン気候下での持続的な食料システムモデルの構築を目指すことを掲げた。和牛も、輸出促進を目指したマーケットインの発想とともに、ESGの視点を重視しつつ、そのポテンシャルを一層発揮していくことが期待される。